

くっそ病弱なお兄ちゃんが旅立つ妹の為に頑張るお話

文月フツカ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あ、ジータちゃんがいた。押し倒したい。

想像以上の反響で、感想で疑問質問を多く頂きました。

出来る限り答えるので、活動報告に病弱なお兄ちゃんのプロフィールとか質疑応答
的なを投稿しました。

不明な所あれば、そつちみれば解決するかも。

←なぜなに、病弱な兄ちゃん！（疑問とか改善点とかこちらにどうぞ）

<https://syosetu.org/?model=kappo-view&kind=237159&uid=174708>

← 病弱おにいちゃんつてどんな奴？

<https://syosetu.org/?model=kappo|view&kind=237158&uid=174708>

※ 更新しても新着活動報告には載らない設定にしました。

※ 感想は、基本的に疑問や「こうすれば良かつたのに」というご意見に対し返信を行っています。ですがそれ以外の感想もしつかり読ませていただいております。

目 次

くつそ病弱なお兄ちゃんが旅立つ妹の為に頑張るお話	46
くつそ病弱だつたお兄ちゃん(故)が格上の人と模擬戦するお話	51
くつそ病弱だつたお兄ちゃん(故)が格上の人に負けるお話	58
くつそ病弱なお兄ちゃん(故)が妹達に語られるお話	8
くつそ病弱なお兄ちゃん(故)が妹の為に目覚めるお話	14
くつそ病弱なお兄ちゃん(故)が妹の為にお姉ちゃんになるお話	21
くつそ病弱だつたお兄ちゃん(故)はお姉ちゃん(人形)になつたお話	30
くつそ病弱なお兄ちゃん(故)が妹の為にお姉ちゃんになるお話	39

くつそ病弱なお兄ちゃんが旅立つ妹の為に頑張るお話

俺の妹はかわいい。身内臓員も入ってはいるが、それを差し置いてもかわいいのだ。まあ最近は村の外でうろついている魔物が慈悲なくジータの剣の鏃になつており、かわいいよりもたくましいという言葉が似合い始めたが。

俺はどうも生まれてくる時に体力とかスタミナとか、恐らく男にとつて大事なものを全部ジータに渡したんだろうというのが、小さいときの親父の意見だ。それを聞いてこう思つた。

——いや多分吸い取られたんだ、と。

免疫力もしつかりと無くなつてゐるみたいで、俺はもう病弱の一言に尽きる。転んで軽い擦り傷を負えば、一ヶ月は治らずに、地味な痛さと格闘することになる。タンスの角に小指をぶつけようものなら半年は悶絶しなければならない。不便なようだが、唯一ジータにも負けないという特技はあるにはある。後述の理由で披露する事は無いと思うが。

で、そんな俺は数年前から肺結核という病氣にかかつた。医者曰く、俺の免疫力でこれに掛かると回復は絶望的のことだ。というかもう絶対無理と言われた。激しく動

かなければ10年近くは生きれるが、唯一の特技だった剣を振るおうものならいつ死んでもおかしくないらしい。喀血と咳、あと全身の激痛と眩暈、おまけに吐き気が常に襲つて来るが、じつとしていれば笑うぐらいは出来る。

まあジータに知られてからというもの絶対安静を食らつたのだが。お兄ちゃん妹に下半身の世話をされたくないんだが。

「お兄ちゃん。今日のお夕飯はスープにするから材料狩つて来るねー！」

買って来いよ。狩つてお前…。ザンクテインゼルの魔物滅ぼす気なのか。

日に日に戦闘狂に仕上がっていくお前を見ていると、将来が不安になるよ全く。お兄

ちゃんあと数年の命なのに、ストレスで更に死期早めるかもしれない。

そうやつてぼーっとしていると、村のすぐ近くで爆発音が聞こえた。どんだけ暴れてるんだと思いつつ、なにやら変な気配もするので、悲鳴を上げる体に鞭打つて行つてみよう。

起き上がるときによつこらせと無意識に言つてしまふあたり、もう精神も年寄りかもしれない。悲しいなあ。

極東の島国で主流と言われている「カタナ」を鞘に入れた状態で左手に持ち、右手で吐血を防ぐため口元を抑えながら何とか村の入り口に着くと、最近良い噂を聞かない工

ルステ帝国の兵士が村長と何か言い合っていた。

話を盗み聞きしてみると、蒼い髪の少女を見なかつたかとの事。荒事を防ぐためなのか、村長は一切知らないの一点張り。膝もガクガク震えており、聞き込んでいる帝国兵士ですらどうするよコレといった視線を向けていた。

すると突然森の方角からヒドラと呼ばれる魔物が出現した。これを緊急事態と見た兵士たちはすぐさま森の方へと駆けていく。まさかあの爆発ジータが起こしたというのか。有り得る。

悲鳴を上げる体を無視して森の中へ進んでいると、突如として上空に……なんだアレ。え、ドラゴン？

閃光のようなブレスを口から放つたドラゴンは、突如として消え失せ、代わりにヒドラの無残な姿が目に入った。あのドラゴンつてまさかジーダが変身したとか言つたりしないよな。正直な話出来そうで怖いんだが。

悠長にしていると、帝国の将官と思わしき人物が突如立ち上がり、ヒドラの死体に紅い小瓶の液体をかけ始めた。

「いけない！ ヒドラが回復したッ…！」

まさかあれが四肢が欠損しようがどんなに重い病気だろうが直してしまうという噂のポーションか…？

くれよそれ。

「もうあの星晶獣は呼び出せないみたいですねえ！ 今度こそ殺して差し上げますねえ！」

舌打ちしながら剣を抜く女騎士とジータ。そして絶望の表情を浮かべる蒼い髪の少女。確かに今のジータではちょーつときついかな。まあでも、最期に恰好付けるぐらいはいいよな。

「お兄ちゃん!? タンスの角に小指ぶつけるだけで半死状態になるお兄ちゃんが何でここにいるの!?

妹よ、言つてなかつたがお兄ちゃんの心はガラス細工なんだ。初対面の人の前で天然を使つて心を抉らないで。と、アホなことを言いつつ、極東の国で量産されたであろう安物の刀「野太刀」に手を掛ける。

シスコン舐めんな。可愛い妹が世話になつた礼ぐらいはしてやる。

「我が身は病弱なれど、この一撃は大切な人を守る誓いの一撃也。絶対寿命が縮むわコレこの誓いをもつて我が剣技、ここに極致に至らん。眠れ安らかに……白刃一閃」

瞬間、文字通りに空間が切れた。比喩でもなんでもなく、一閃の傷が空間に付いた。

ヒドラに放たれたソレは鱗や肉をバターのように容易に切断した。

複数あつた首は全て一撃で落とされた。だがヒドラはそれに気づかずに、必死に首を元に戻そうと根元が動いている。だが落ちた首は既に地面に在り、世界がヒドラの最期を認めた途端、力なくその場に崩れ落ちた。

いつの間にか野太刀が納刀されている事実に気付いた三人が、ヒドラと青年を交互に見やる。この人物は今、達人と呼ばれる武術家以上の絶技をやってのけたのだ。

お兄ちゃん凄い！と駆け寄ろうとした妹が見たのは、膝を尽き口から夥しい量の血を流す、唯一の肉親であつた。

「お兄ちゃん！ しつかりして！ 血が：せつかルリアのお蔭で私、生き返れたのに……なんで、こんな」

「泣く、なよジー。俺の病気なら遅かれ早かれ、こうなるんだ」

止まらない血を妹に付けないようにしながら、青年は死に際に精一杯の笑顔を浮かべる。

「イスター、行くんだろ？ 兄ちゃんは付いて行けないけど、見守ってはいるから、な？」

「そんなの嫌だよ！　お兄ちゃんも一緒に行こう!?　お兄ちゃんとビイとカタリナとルリアと私の五人旅、絶対楽しいよ!?　だから早く血を止めて、ね!」

「兄貴……」

「ジータの兄君……私の力不足だ。本当にすまない」

「お兄さん。わ、私の魂をもう一回つ……」

「……たとえ肉体が復活しても病気は消えない。だから、気持ちだけ、ありがとう」

青年は瞼をゆっくりと閉じる。

「いやだよお兄ちゃん！　置いて行かないでよ……独りに、しないで……」

泣きじゃくる頭に、優しく手が置かれた。

「独り、じゃないさ。この人たちは本当にジータを寂しくさせたりしないさ。俺も、ずっと見守っているから、いつものように笑顔で、精一杯生きるんだよ」

青年は頭を優しく撫でると、ゆっくりと、ゆっくりと力が抜けていき、地面に手が落ちた。

その手を握りながら、少女の慟哭が森中に広がった……。

数日後。

「行ってきます。絶対見守つていてね！ お兄ちゃん！」

「兄貴、俺、絶対ジータを独りにしないからな。ゆっくり休んでくれよ！」

「ルリアも、ジータもビイ君も、絶対に守る。あなたの生き様、一生忘れない」「お兄さん……絶対、絶対にジータを独りにしません！ 私の覚悟、見ていて下さいね！」

ザンクティンゼル。この小さな島から、後に世界中を巻き込む伝説の騎空団が始まつた。

『やべえ……成仏出来なかつた』

くつそ病弱なお兄ちゃん(故)が旅立つた妹を見守るお話

俺の妹はかわいい。そう、たとえ訓練を施された兵士を一方的にボコボコにしていたとしても、見てくれは良いから人が集まつてくる。まるで誘蛾灯だと思いながら、俺は妹の将来を心配する。

性格はどうなのかと言われると、基本的には明るくて社交性のある奴なので、一緒にいると楽しいだろう。

まあ本人は何か呪いか祝福か受けているかの如く、面倒なことに巻き込まれていく体质なのだが。

ビィはもう慣れているとして、カタリナさんという騎士や蒼い髪のルリアちゃんはこの先知ることになるだろう。ジータという存在がどれほど退屈という言葉から嫌われているのかを。

そんな事を俺の体が埋葬されている墓を背にしながら、去っていく3人+1匹を眺める。

いやしかしアレだ。ジータが心配で成仏出来なかつたとはいえ、体がこんなに軽いなんて初めてかもしねれない。

なんならタンスの角に小指をぶつけても直ぐに痛みが引きそうなぐらいだ。しかし幽霊となつても何をすれば良いんだ。心配だから付いて行く、もとい憑いていつても、余計に成仏出来なさそうである。

どうせ面倒に巻き込まれる星の下に生まれた子なんだし、死人がギャーギャー騒いでも意味はない。ちゃんと無事に五体満足で帰つて来て、墓前でただいまとでも言つてくれれば、今度こそ安心して逝ける。それまでここで気ままに待つているとしよう。

『行つてらっしゃい』

「ねえビィ。私思うんだ……お兄ちゃんはきっと私たちの旅を近くで見守つてくれている気がするの」

「あー、何となくわかるぜ。兄貴なら色々言いながらも見ていてくれるだろうなあー」「2人はお兄さんの事が大好きなんですね。なんだか胸が暖かくなるお話しです！」

「キッチンと挨拶しておきたかったものだ」

「よーし、これからも頑張るぞ！」

拳を高らかにあげて、おー！と言ひながら進み始めたジータを微笑ましく見送る。お

兄ちゃんはしつかりとしているジータを見れてとても嬉しい。

『おつづえ』

その瞬間。突如として首元が引っ張られる感覚。踏みとどまろうとしても、まるで首輪を付けられているかの如く無理矢理引き摺られる。

何事かと思いつらちゃんと視線を向けてみると、何やら自分の首に糸が巻き付いており、その先が……先が……。

『じ、ジータの全部の指に滅茶苦茶に絡まつてやがるッ』

『まずはどこに行こうか』

『いや妹よ死人に優しくして!? お前の無邪気さが死後のお兄ちゃんを犬のごとく引き摺つてるぞ!』

死人に口なし。死者の声が生者に聞こえる筈も無く、首輪をつけて強制移動を喰らっている俺はまるで奴隸のごとく。美少女に犬のように扱つてもらつて羨ましいか?妹にコレやられるなんてもう恥ずかしくて穴に入りたい。まあすでに体は墓穴の中だが。やかましいわ。

「お兄ちゃんとこの綺麗な大空を旅したかつたなー」

お兄ちゃん今現在お前に引っ張られてお空にダイブしそうなんだが。だめだめ許しませんよ。独り立ちしないと。

唐突に話が変わるが、バンジージャンプと言うのを「存知だろうか。何でも高いところから命綱を付けて飛び降り、スリルを楽しむという、都会の若者で人気らしいアクティビティ。

小型のものとはいえ騎空挺は騎空挺。それ専門の技術を学んだ人にしか操縦は出来ない。ましてや戦闘が専門である軍人騎士が、趣味でもないので騎空挺操縦の技術を理解しているなど、普通有り得ない。

旅立ちに使うこの騎空挺は狭く小型があるので、靈体である俺すらも中には入れなかつた。なので外の羽にでも掴まるしかないのかと諦めていたが、なんとすり抜けて掴めなかつた。幾度も羽を握ろうとするも、そのたびに虚しくすり抜ける俺の手。

おまけにあまりに酷いカタリナさんの操縦技術。それは変な糸で首縛られて引き摺られている靈体の俺にも影響を及ぼしている。その結果何が起くるかお分かりいただけるだろうか。

『あ　あ　あ　あ　あ　！』

紐。上を見れば今にも落ちそうなフラフラの騎空挺。下を見れば、見たことを後悔する

ぐらいの絶景。

生身であれば怖くて気絶できるのだが、そこは靈体の有難迷惑な仕様か何なのか、気を失う兆候が一切感じられない。生前、ジータのあまりにも破天荒な振る舞いに疲れた時、さつさと自分から眠るように気絶出来た身が羨ましく感じるとは…!

というかそろそろ空挺から聞こえる嫌な音が大きくなり始めた。まあ流石にここまで来たら俺でも分かる。痛みがあるかは知らないが、地面に突つ込む未来は変えられないらしい。というかもうすぐそこまで地面が来てる。

『お、おさらば』

「面白ない……騎空挺の操縦が、まさかここまで難しいとは……」

地面に叩き付けられて紅葉おろしになる衝撃がここまでとは思わなかつた。痛みこそ無いが、純粹な衝撃が俺の精神性をガリガリと削つていつた。全部完璧な人間なんて居ないと言つてあげたいが、如何せん言葉も届かない上に、あんな事を体験させられたら、少々腹に据えかねる。

だが良く考えなくとも分かる事だが、結局のところはジータが無意識に俺を引っ張つていたのが原因なのであつて、カタリナさんはそこまで悪くは……いややつぱりちゃん

と習熟してから操艦してほしかつたです。

そのあと大きな音を聞きつけてやつてきたであろうラカムという男性に色々言われたジータ達は、街道を進み街へと行くことにした。無論、俺を引っ張つて。

ちなみに去り際にラカムさんはジータらにもう会うことは無いと言つた表情をしていたが、ジータ歴＝死亡年齢の俺に言わせれば、その認識は実に甘い。

ここからなし崩し的に巻き込まれ、いい話風に締められて付いて行く事になるだろう。俺のジータに関する予想はほぼほぼ当たる。何やら事情を抱えているラカムさんも、ジータに出会つたことで何かしらの進歩はあるだろう。……例えその過程が恐ろしく彼女に振り回される形であつても、頑張つてくださいとしか俺には言えないな。

どこかに今の俺をどうにかできる人が居ないかと思いつつ、そよ風が気持ち良い街道を、ジータに引っ張られて歩いていく。ビィを抱きかかえながら二人と話をするジータはとても楽しそうで、それを見ていると俺も自然と笑みが浮かんでくる。

このまま物騒なことを呟かずに少女らしく――

「あ、魔物。斬らなきや」

知つてた。

くつそ病弱なお兄ちゃん（故）が妹達に語られるお話

「そういえばジータの兄君はどのような人物だったのだ？」

ある日、騎空挺の上でカタリナさんがジータに俺の事を聞いた。そういういえばジータの主観的な俺の評価を聞いた事はなかつた。

「え、お前兄が居たのか？」

普段は猫を被つている鍊金術師の開祖であるカリオストロさんが最初から素で聞い

てきた。
「うん居たよ。ザンクティンゼル旅立つ時に、私たちを守るために死んじやつた……けど

自分で言つて落ち込むなら最初から言わなければ良いんだとは素直に言えないな。
それだけ俺の事を思つてくれてるつて事だしなあ……。でもいい加減この首輪外して
？

「お、おう……すまん」

普段は魔物絶対殺すジータが珍しく落ち込んでいるのを見て、どう対応していいか分
からないのか。薄情かもしけんが俺も分からん。

「あ、お兄ちゃんの事だつたね。そうだねえ……ビイ？」
「んあ～？ そりやもうあの一言しか無いと思うぜ？」

え、ジータとビイの間で俺に対する共通認識の一言？ それは流石に俺自身でも分かるぜ。生まれた時から3人一緒に死んだもんな。

『くっそ病弱』

超優しいお兄ち……ええ？ 事実だけどなんかお兄ちゃん悲しい。重ねて言うが事実だけどもツ。

「まず小指を角にぶつけたら半年は腫れと痛みが治まらないね」

「転んで出来た掠り傷一つで治るのに結構時間かかつてたな」

「お医者様に言われてたけど、免疫力とか抗菌？とかいうのが生まれながらに完全に死んでるって」

「あー、肺結核とかいうのにもなつてて、年中咳と吐血してたな」

「全力疾走とかしようものなら、走り始めた瞬間に吐血からの横転。掠り傷のコンボもあつた」

良く生きていられたよな俺。死んだけど。

「ええ……そいつ本当に生活出来てたのかよ」

ザンクティンゼルの澄んだ空気じやないと肺結核悪化するとか言われた日には、ジー

タとは都会に旅行とか行けないのかと落ち込んだ。まあ団らざも今は似たような状況ではあるのだが……。

「そ、想像以上に兄君は体が弱かつたのだな」

ルリアちゃんもカタリナさんもドン引きする脆弱さだつたらしい。

「で、でもでも！　私たちを守るためにヒドラをこう、ズバーッとやつたのは凄かつたです！」

「ああ、あのヒドラを、明らかに安物の刀でありながら私にも見えない速さで斬り捨てたのは驚いた」

あ、刀の話をしだしたからナルメアさんが目敏く聞きつけたらしい。ふわふわとジータの近くに来た。

「団長ちゃん。団長ちゃんのお兄様はそんなに強いの？」

はつきり言うが強くない。あんなの文字通り、ジータの為ならこの命尽きても良いといふ覚悟の下、無理矢理氣力で体を動かしたにすぎん。肉体は滅びて尚、その魂はジータに首輪を嵌められているが。

「少なくとも制限時間を設けた上で、1対1の剣での勝負なら私は勝つた事無いなー」

その話を聞いて、遠巻きに聞いていた他の団員たちの驚愕の視線。なんか自分の事なのに恥ずかしい。

「でも戦闘とか出来ないオイラでも分かる事なんだが、正直勝つだけなら簡単だぜ？」

「まあね。スタミナが無いとか、壊滅的じやなくてマイナスに振り切つてるから、ちょっと持久戦に持ち込めば勝手に倒れるしねえ……」

「まあそれを差し引いての剣の腕は凄いというか、傍目から見ると気持ち悪かった ビイ！ そんなに変な腕してたかな俺の剣。

「ええっと……団長ちゃん？」

「あ、ごめんなさい。強さでしたね。刀を振つてるとね、なんか剣がぶれるんだお兄ちゃんつて。なんか一撃しか喰らつてない筈なのに、三撃同じ所から同時に喰らつたみたい な」

「それほど神速の剣技という事か」

「あ、オイラそのネタ聞いた事あるぜ。ジータがいつ自分で気づくか、兄貴はいつも楽 しみにしてた」

「ビイズるい！ あれ一体どういう仕組か未だに分かんないんだよ！」

「まあ兄貴からは、言うなとは言われてねーしな。で、兄貴が言つてた言葉そのまま伝え るから、オイラに理屈とか聞かないでくれよな」

「いつの間にか、剣で戦う奴ら全員が集まつてきてる。なんだこの公開処刑……。

「早く早く」

「ええと、一の斬撃の中に二の斬撃と三の斬撃を内包する。それをほぼ同時では無く全く同時にやる事で、例え相手が盾で防御しようが、その上から叩き斬る……らしいぜ？」

「ん？……ええ？　なんだそれは」「あ、あらあら？……あらあら？」

「オイラも初めて聞いたときは何言つてんだって思つたけど、事実そうなんだ。そんな防御不可の剣を奥義でもなんでもなく、ただの通常攻撃で振るつてるんだぜ？」それに加えてあのジークですら突破出来ないんだぜ？」　言つちや悪いが、剣の腕に関しては規格外つて言つた方がいいかもしれないぜ」

長々と説明ありがとうビイ。でもそんな化け物みたいに言うなよ。期待外れかもしれないが、練習でもなんでもなく、初めて剣を握った時から、感覚でやつてる事だからなあ。俺自身も、え、出来るだろこの程度の説明しか出来んのだ。

「団長ちゃん。お兄様の使つていた刀つて持つてるかしら？」

「あるよ！　取つてくるね」

そういうとジークは私室へと駆けて行つた。つていうか俺も引つ張られていく。
ああ～れー。

「……団長ちゃん達には悪いのだけれど、超技巧の剣術の代償が言つていた病弱さだと

しても、不気味だわ。目にも見えない速さで連続攻撃では無く？ どれだけ速く攻撃出来たとしても、突き以外で同じヶ所から全く同じ攻撃をするのは不可能。その突きでさえ神速を誇つても絶対に一撃と二撃の間にラグはある」

「そうだな。人体の構造上、全く同時に同じ攻撃を出すなど土台無理な話だ」

「そもそも斬撃の中に斬撃を内包なんて芸当、出来る奴居んのか？」

「考えられるとすれば、武器に備わっている能力だが」

「兄貴は今ジータが持つて来ている刀しか持つてなかつたぜ？ しかもその刀ですら、行商人から格安で買った大量生産品だしよ」

「おーい、持つてきたよー！」

相変わらずの安物だなその刀。もつと良い武器振つてみたかつたが、もう叶わぬ夢だしなあ。あーでも別に強さとかどうでもいいな。なんやかんや言いつつもジータが笑つていられるなら、何も要らねーな。

「見せてもらうわね」

そういうつてナルメアさんやカタリナさん。カリオストロさんもじ一つと検分し始めた。

「……太刀ね」

「ああ、太刀だな」

「何の能力も無いね☆」

あつたらあの行商人も凄い値段吹つかけてくるしな。たしか300ルピすらもしてないぞソレ。

「この武器でヒドラを一撃かあ……そつか。本当に言葉通り、決死の一撃だつたのね……」

ま、お兄ちゃんとしては当然だな。妹を守るためなら命の一つや二つ差し出すさ。

「最近、お兄ちゃんが近くにいるつて確信を持つて言えるんだよね。やつぱりこれは見守つてくれてるつて事だよね」

それを聞いて、ルリアちゃんも笑つてジータの隣に立つ。俺からもルリアちゃんに感謝を。ジータを助けてくれて、本当にありがとう。騒がしい妹だけど、これからもどうかよろしくお願ひします。

「あ、魔物！ 斬らなきや！」

……成仏出来んなあ。

くつそ病弱なお兄ちゃん（故）が妹の為に目覚めるお話

騎空挺がある場所へと進んでいる中、風が打ち付ける甲板にてその一人は居た。

カリオつさん。

俺が密かに心の中でそう呼んでいる存在は、ジータに舐め回す様な視線を送りながら、グルグルと周囲を回っている。この人は時々予測出来ない事を何の前触れもなくやりだすから怖い。

「……ええつと」

流石のジータも無言で見つめながらグルグル回られると落ち着かないらしい。

「あ、気にしないで暫くジッとしてねつ☆」

この矛盾したセリフを猫被った声で平然と出せないと、鍊金術なんて概念は作れないんだなど尊敬する。

前にこのカリオストロさんの過去を聞いた事がある。聞いたというか、ジータと四六時中居るようなものだから勝手に聞いてしまったという方が正しいが。俺のように体が弱かつたらしいが、今の姿からは想像出来ない。

にしても何故急にそんな回り出したのか。もしかして存在が全く謎に包まれている

紐が見えているのだろうか。

「んう!」

突如として、カリオストロさんがジータの口の中に指を突っ込んだ。ええ何してるんですか。あーあー苦しそうにして涙浮かべてる。

「はい、終一わり。ご協力ありがとね団長さんつ☆」

後に残されたのは顔を赤らめて荒い息を上げるジータだつた。兄が妹に欲情することは無いと思うが、こうも目の前で絡まれると、些か下半身に来るものがある。

そんな事があつた数日後。今度はカリオストロさんの部屋にいた。この部屋は相変わらず難しい実験器具や本が所狭しと並んでいる。頭の出来が良いとは言えない俺には、見ているだけで頭が痛くなつてくる代物ばかりだ。

そんな俺の気など氣づくはずもなく、ジータはお勉強の時間だ。

アルケミストなんてジョブ、まさにカリオストロさんが教えるにぴったりの内容だ。
「だから違うつて言つてるだろ!? その比率で混ぜると結局さつきの薬品が連鎖反応で爆発ううううう！」

体動かすの大好きジータにお勉強を根気よく教えてくれているこの人には、なんかもう頭が上がらない。

髪も服もボロボロになりながら口元を痙攣させてるけど。

「ふええ」

「何がふええだバカ！ んな台詞俺が言いたいぜ！」
もつと怒つてあげてください。いい薬です。

暫くして、ひと段落終えた二人はティータイムになつていた。

けども誤魔化されんぞ。後でしつかりカリオストロさんに謝れ妹よ。こんな惨状生み出しても匙投げない先生つて凄いありがたいんだぞー？

「さつきから気になつっていたんだけど、あのカプセルに入つてるのは？」

「ああアレか。あれは試験的に作つた奴でな。近接戦闘用にカスタムした体だ。その名もカリオストロ^{パージョン^{1.}}試製高機動軀体だ^{5.a}」

高機動の名の通り、いつもカリオストロさんが着ている服とは大分違つた。もつと可愛さを引き立てる小物とかがくつついていたのに、取り外されている。激しい動きを阻害しそうなものは徹底的に外されていた。

「まあそもそも、そんな近接戦に持ち込むほどカリオストロは弱く無いけどねつ☆」「いいねえ！ 私と戦つたらどつちが強いかな」

「末恐ろしい事言つてんじやねーよ」

末恐ろしい事言つてんじやねーよ。

「そんな実験室での一幕からまた数日後。騎空団は夕焼けの空を飛んでいた。
「痛み無き戦闘団?」

「この付近の群島で暴れまわつてゐる奴らですね。他の騎空団との交戦もあつたので
すが、生き残つた方達は大分精神がやられたみたいでして」
何度も思うんだが、シエロカルテさんは一体どういう伝手でこんな依頼引っ張つてく
るんだ。

「そいつらつて何を目的にしてるんだろ」

「きつととにかく戦いたいって連中の集まりなのよ」

ジータやイオちゃんの憶測通りだけならいいけどな。ただ戦いたいだけならジータ
が暴れたり、ナルメアさんが暴れたりすればいいだけだが。
どうせ戦利品と称して畜生働きもやってるんじゃないかな。

「あ、噂をすれば?」

「噂をすれば!?

この人やつぱり腹の中真っ黒じやないのか。

依頼説明から目標との接敵までの最短記録行つたんじやないかコレ。むしろ今説明

中だつたぞ。

騎空挺で騎空挺に直接乗り込んでくる気か。にしても数は30前後とそれなりにいるな。

「急旋回掛けるぞ！」

ラカムさんの号令で、団員たちはしつかりと態勢を取る。

「畜生！ ちよつと試験運用しようと甲板に出した途端コレか！」

カリオストロさんがキレながら試験的な体を物陰に隠す。なんかもうあの人可哀想すぎる。

「あいつら、相當にやばそうだぜ。全員目がやばい」

「……団長ちゃん。これはちよつと本氣でいかないと不味いわ」

恐れずに騎空挺に飛び込んできやがった。目もそうだが、口元が常に笑っているのが不気味だ。操られているつてわけでも無さそうだし。何より、恐怖心つてものが一切感じない。

「何でもいいよ。行くよ皆！」

ジータが駆け出したと同時に、敵も味方も戦闘を開始した。

「せいっ！」

ナルメアさんの刀を受けた敵だが、斬られたというのに全く怯まない。寧ろ笑みを深めてさらに突撃してくる。

「何なのよもう！」

イオちゃんの魔法も効いていない。それどころか自分から当たりに言つている節すらある。

噂というか、名前通りといふか。痛み無きの言葉通りだ。しかも厄介なのはそれだけじゃない。

「コイツも、コイツも。コイツら全員、並みの精銳騎士団より腕が立つ！」

敵の1人1人、末端に至るまで恐ろしい練度だ。まるでジータの騎空団みたいだ。

おまけにただ強いだけじゃない。手段も一切選ばない。中には刀身に毒を塗つてるやつもチラホラ。

「A A A A A A A A A A A A A A A A A h！」

「斬つても斬つても、倒れた敵は暫くしたら起き上がりつてくる……」

致命傷でない傷なら戦闘を続行し、致命傷であればその場で倒れ伏す。だが暫くすれば、突如として奇声を上げながら飛び起き、再び武器を振るつてくる。

こつちの精神が持たない。

いくら歴戦の強者が多いこちら側でも、永遠に戦い続ける事は出来ない。

敵は夕焼けを背にしているので、環境も敵に回っている。

「アイツっ」

そんな不死の軍団の最後方、一人の大柄な人影。体も大きいが、何よりその盾が異常だ。まるで城壁を切り取つてきたかのような分厚さがある。兜で顔が見えないが、禄でもない奴だというのが良くわかる。

だがこの膠着に飽きたのか、大盾の持ち手を両手で掴み、振り上げた。

それと同時、一気にその大盾を地面に、つまり騎空挺の甲板に叩きつけた。

！

凄まじい衝撃と共に、船が揺れた。騎空団の皆は衝撃に耐えきれず崩れ落ち、物陰に隠してあつた人形が俺の傍に倒れてきた。

ジータが咄嗟に起き上がり、敵をすり抜けて、大盾の奴に一撃を入れる。
その攻撃も、簡単に大盾に弾かれた。

とつさにカタリナさんが援護に掛けるも、到底間に合わない。
その瞬間、周りが、突如として遅くなつた。

心は思う——おかしいな。今までだつて命の危険は沢山あつたじやないか。何を心配する必要がある。

体は動く——確信がある。今何かしなければ、今回ばかりは決定的に後悔する事になるんじやないか。

目に映る——あれを使う。今まで無い頭で鍊金術開祖の本を盗み見ていた。恩師の為にも、諦めない。

手に掴む——それは刀だ。傷つける武器ではあるが、手の届く範囲なら、誰にも後れを取る気は無い。

魂は叫ぶ——妹を助ける。目に入れても痛く無い。唯一残った肉親を、こんな奴らに絶対奪わせるな。

手に取るようにわかる。少し重い着ぐるみを着る感覚だ。数瞬有ればすぐ慣れる。指の先、爪の先までピンと伸ばすように。長い袖に腕を通すように。

目は開いた。

体は動く。

音も聞こえて、力も入る。

動け！ こんなガラじやないのは分かつている。でも動け！

大切な人を失うな！

29 くっそ病弱なお兄ちゃん（故）が妹の為に目覚めるお話

妹を守れなくて、何がお兄ちゃんだ！
ジータ

「……え？」

「ほう。どこから現れたのか、興味深い」

くつそ病弱なお兄ちゃん(故)が妹の為にお姉ちゃんになるお話

たつた一撃。
されど一撃。

ジータとの間に割つて入り、咄嗟に簡単な一撃を入れたのだが。新手の2名に防がれ
た。

「お前たち」

向こうもこういう事態を想定していたのか、異常なほどに対応が早い。他の奴らとは
違い、持つてある剣の鞘に白い布が巻かれている。

「お下がりください。あなた様に挑戦する権利があるか、見極めます」

虎の子の親衛隊か何かか。こんな奴ら、もつと全空に噂が広まつてもいい筈なんだ
が。

「構えろ。貴様がどれほどか見るとしよう」

構え、か。他の武器はどうか余り知らないが、刀の構えには上段、中段、下段の基礎
三つがある。

上段は既に振り被る態勢なので、一番攻撃力がある。中段はあらゆる状況に即座に対応出来る。

下段は比較的攻撃を回避しやすいが、一撃の威力が低い。

俺の場合は、生前の体が弱すぎて、そもそも刀を長時間構えていられなかつた。上段に構えようものなら一分も持たず筋力疲労を起こす。中段は姿勢の維持は何とか出来るが、そこから何もできない。

唯一下段だけは形にはなつていた。まあ下段にしても、構えている時はほぼほぼ力も込めていい。ただ握つて持つてているだけ。

「ふん。それが構えだというのなら、始めようか」

今の台詞で、こいつらに対する警戒度を上げることになつた。普通ならこんな楽な姿勢の下段など、舐め腐つてているようにしか見えないからな。それだけ相手も観察眼が備わつていて。

さて、基礎的な復習がてら動いてみるか。弱い体でもジータに勝てていた、無い頭を使つた自論剣術がどこまで通用するかな。

「行くぞ。貴様の血で私はまた強くなる」

刀を振るうとき、腕の力だけではただ振り回される。なので全身をバネの様に捻らないと形にならないのだが、生前はどうあがいてもそんな芸当出来なかつた。そしてそれ

は健康な体を手に入れても、即座には出来る自信は無い。

ならば生前と同じやり方で戦うしかない。それ即ち――

「この、ただ回避に徹するだけで――、がッ……」

一人目。武器を振るつている時、戦闘中に口を開くなど、案外無駄な行動が多いな。

それがお前の辞世の句か？

氣分はどうだ。咄嗟に自分の武器で防ぐも、その武器ごと、着用していた防具ごと体を真つ二つにされた氣分は。

無駄な攻撃は一切振るわない。刀での鍔迫り合いなど、以ての外だ。刀身の損耗も激しいから、継戦能力も落ちる。

ならば本当に必要最小限の動きで敵の攻撃を躊躇し続ける。
敵も達人と呼ばれる程なら、その攻撃密度も凄まじい。

回避のコツとしては、あまりその場から動かないこと。最小限の動きで敵の剣筋から外れる。

生前も今も、幸いにも刀の才能だけは少しあつたから出来る芸当だ。

そうして回避し続け、相手の動きに致命的な隙が出来た時、または俺が打ち込めると確信した時が、敵の最期だ。

その瞬間、攻撃を振るうその時だけ、全身全霊を持って刀を振るう。

斬撃を内包し、防御も許さない。

剣で俺の攻撃を防げると思うな。

鎧や盾で俺の攻撃を防げると思うな。
たかが城壁が、たかが騎空挺の装甲が、妹を守るお兄ちゃんの一撃を凌ぎ切れると思
うな。

「……」うも簡単にやられたか

まあ一対一ならこれでいいんだが、敵が複数いるとこの戦法もあまり通じない。警戒
して攻めてこなくなるからだ。

そして予想通り様子見のごとく構えて動かなくなつた。

だがそこでカリオストロさんがこの体の服に入れていた薬品が役に立つ。

俺は唯一、刀がそれなりに使えるから使っているのであって、使えるものは何でも使
う。

刀身に毒を塗るのも正しい戦術であるし、土や砂で目潰しも正しい戦い方だ。隠し
持つてゐるなら隙をついて銃を撃つてもいい。事後の処理をちゃんと出来るのであれ
ば、人質を取つてもいいし毒ガスを使つてもいい。

戦場に事の善悪無し。ましてや襲つてきたのなら尚更文句も出ないだろう。

つていうかジータにもよく目潰しやつた。

つて事で、衝撃で爆発する薬品を投げつける。

一瞬怯んだ相手の視覚外から強襲を掛け、一刀のもと斬り捨てる。

これが、剣の才能が僅かしかなく、病弱な俺がジータに勝つために無い頭で必死に考えた俺の戦い方。

ジータの為なら、星晶獣だつて殺してみせる。

▽

目の前にいる人は誰だろう。

誰だろうつていうか絶対お兄ちゃんだ！

お兄ちゃんがお姉ちゃんになつて帰ってきた！

走つたらすぐに転倒して数か月寝込むお兄ちゃんだ。

靴履いてるのに足の小指ぶつけたら一ヶ月は痛みが引かないお兄ちゃんだ。

起き上がりつただけでその日の体力ほぼほぼ使い切る勢いだつたお兄ちゃんだ。

戦いでついぞ一本も勝てなかつたお兄ちゃんだ。

私の為に命を投げ捨てて助けてくれたお兄ちゃんだ。

やつぱり見守つてくれていたんだね。やつぱり私たちザンクテインゼル人の兄弟の

絆は、死を持つてしても断たれない！

よーし力が湧いてきた！

ちょっと間抜けな所を見せたけど、一番お兄ちゃんを見てきたから大丈夫。

お姉ちゃんになつてもお兄ちゃんだよ！

んん？ まあ変な言い回しだけど大丈夫。

さあ皆、もうひと踏ん張り行つてみよう！

ナルメアさん、そんなお兄ちゃんを凝視してないで戦おう？

カリオストロさん、そんな鳥がバハムートのビーム喰らつたみたいな顔をしてないで。

色々言いたいことはあると思うけど、今はただお兄ちゃんと戦おう！

さつきまで怖かつたけど、もう大丈夫。ルリアやカタリナさんにも大分迷惑を掛けたし、これからもつと恩返ししなきや。

ほらほらランスロットさんもパーシヴアルさんも。

あれ、つていうか剣を使う人みんなお兄ちゃんを見てる。まあやつぱりお兄ちゃんの戦い方つてかなりヤバいからね。仕方ないか。

▽

「お兄ちゃんがお姉ちゃんになつて帰つてきた！」

なんだアレは。

それが、ジータ率いる騎空団の中で、剣に精通する者たちが抱いた感想だ。的確に攻撃を躱すのは百歩譲つて、練習次第では出来るだろう。だがその場を殆ど動かず、『最小限の動きだけで延々と躱し続ける』など、誰も出来ない。

ましてやあの攻撃は何だ。以前団長であるジータから聞いてはいたが、あの攻撃は異常だ。

ただの一刃。攻撃のその瞬間だけ、恐ろしい剣圧が周りに吹き荒れる。ただでさえあり得ないのに、どういう事だろうか。

斬撃の中に、斬撃が見えた。それも三重に。

そもそも相まって、防いだ相手が防具ごと両断された。

剣同士がぶつかり合うこともない。鍔迫り合いなど起こさず、ただ即死の攻撃だけが振るわれる。

あんな芸当を出来る物など、この空にはほぼ居ない。全空の脅威たる者らは分からぬいが、世界でも指折りの実力者や星晶獣が50以上は居るこの騎空団でも、あそこまで

異常なモノは居ない。

「振るう一撃、全てが必殺……」

ナルメアが青い顔でそう呟いた。

まだ説明は行く。
読んで字の如く必殺。必ず命を絶ち殺す斬撃。これがその人の使う奥義であるなら

武器に秘められた力を開放するなり、与えられた加護を使うなりと説明できる。

だがアレが持っている刀はどう見てもそこら辺にあつた量産品だ。自分たちの持つ
ている名剣や神剣の類ではない。大量生産されたただのなまくらだ。

だというのに。自分の技量だけで、あそこまでの超絶技巧をなし得るアレは何だ。

一流の戦士は武器も一流だ。整備も欠かさないし、欠かせない。その武器の能力も相
まって今の強さがある。

だが、だが！

今ジーナの目の前にいる存在は、悉く規格外だ！

戦いたい！ 戦いたい！あの剣技は一体何だろうか。自らの技量がどこまで通じ
るか見てみたい！

この気持ちが、敵と戦つていた団員たちに急速に広がっていく。

だが一方で、敵には恐怖が植え付けられていた。普通に斬られるのは分かる。しかし奴が刀を一太刀振るう度に、団員の一人が必ず死ぬ。

これでは望んでいた戦いとはほど遠い。

死力をぶつける殺し合いではなく、一方的に殺される狩りになってしまった。しかも自分たちが獲物だ。

親衛隊二人が簡単に殺され、向かつていった23名は、ものの数十秒で斬り捨てられた。

一太刀で一人両断し、たつた23回の攻撃で、向かつていった23名は死んだ。

相手は何も言葉を発しない。ただひたすらに無表情だ。

そして遂に、大盾が重く声を発した。

「化け物めツ……」

その言葉を放った敵の首領にゆっくりと顔を向け、何の感情も得ずに見返すのだった。

くつそ病弱だったお兄ちゃん（故）はお姉ちゃん（人形）になつたお話

なんだこれ。

言葉が出ないつてこんな状態を言うのか。

試験的に作つていた俺のスペアボディが勝手に動き出した。それだけでも発狂しそうなのに、何か異常なほど強い。

誰だよお前。

いやジータがお兄ちゃんとか言つていたから、魂だけ入つたんだろうけども。

まあ魔法や鍊金と言つた現象もそうだが、幽霊とかも割といるこの空。

いまさら？ 魂が？ 何かに宿つた所で？

ははは。

はあ？

この俺が生身の頃の時間の全てを費やして成し遂げた事を、こともあろうにものの数秒だと？

そのうえ十全に体を動かして異常な剣技を振るつてやがるぞコイツ。
鍊金の才能やらセンスといったモノは一切ない。文字通り無理矢理入り込みやがつ
た。

ジータを守るためなら何の代価もなく、等価交換を無視してやるつてか?

何なんだこの兄妹。俺の妹の方が何倍も常識と知性があるよう見える。

方や行動全部が台風を引き起こす未曾有の大天災の妹。

方や俺の十八番をゴリ押しで真似しだした不気味な兄。

何がどうすればこんな兄妹が生まれてくるんだ。やる事成すこと悉く規格外のソレ
じやねーか。

胃が痛い。

この体になつて初めて胃痛がした。

▽

盾というのは一見鈍重に見えて、その実とても有効な装備だ。

殴つてよし守つてよしと色々出来るのは、選択の幅が広がつて有利になる。

ましてや壁かよと思うほどの分厚く巨大な盾を持ち、それを扱える十全な技術と体が

あるなら尚のこと。

「人を簡単に斬り捨てようと、表情一つ動かんとはな」

視線を自分が持つていてる刀に向けても、映るのは何の装飾もないただの量産品。あの盾に正面から斬り込んで、恐らく刀身が持たない。かといって武器を借りようにも問題がある。

こんな状況で態々予備の武器を持つている人など居ないし、貸してくれと言つても急には無理だろう。

倒した敵の武器を奪おうと、持つていてるとほぼ同じ性能では、焼け石に水だ。では盾持ちの右手に装備しているあの大きな剣はと、これも選択肢に入らない。おそらく筋力が足りず持てない。

しかもコイツよく見たら鎧も結構ゴツイのを着込んでいる。

悲観的な考えが浮かんでは消えてくる。他の人たちは、敵の団員と戦闘中だし、カリオストロさんは……うわ目が合つた超怖い。

「大丈夫」

……そうだつたな。お前は絶対に諦める性格じやなかつたな。

いつの間に、どうやつてかは知らないが、侍の姿になつてているジータを横目に懐を弄る。

手に取つた衝撃で爆発する薬品を、そつと適当な所に転がしておく。幸運な事は1つ。俺どジータが敵の懷に深く入り込んだおかげで、一番船首側に居る

という事。

不幸な事は2つ。敵味方が入り乱れて騎空艇の中央付近に居る事と、俺はジーダが無事なら手段とかにあまり拘らない事。
でも……。

「みんなー！ 麻痺に気を付けてね！」

これだもんなあ。俺が懐を弄った段階で何をするのか分かるのは、兄妹の良い所だと
思う。

じやあ、麻痺毒混入の煙幕、行つてみよう。

「全員息を最小限に抑えろ！」

この盾持ち、団体に反して賢い。そう思うと同時に、煙幕が風に乗つて船を覆う。
カリオストロさんには頭が上がらない。

「あの大きい人、麻痺に抵抗あるよ！ 行つてくるね！」

何故そこで気を付けてねの一言も出て来ない？ わが妹ながら、もう少し周りを労わ
る言葉を出しても罰は当たらないと思うぞ。



やはりというか、ジーダが圧倒的に有利だ。本来なら正面からやりあえば突破は不可

能に近いのだが。

「それっ！ はいそこー！」

正面から堂々と向かつて斬りあうジータ。

「おのれえ！ この程つがああ!? 貴様あ！」

後ろから斬りつけたり、落ちていた弓や銃で嫌がらせをする俺。

なまじ防御力が高いせいで、躊躇殺しのソレだ。

敵が再び大盾を振りかぶり、衝撃波を起こしてくる。後ろから小突いていたおかげで、足元まで目が行つてなかつたな。

その攻撃がお前の最期だ。

ジータは跳躍で回避し、元から離れていた俺は刀を構えて走る。

戦場に一際大きな爆発音が響いた。

先ほど転がしておいた爆発薬品に、ちょうど振り下ろした盾が当たつたらしい。音の大きさに対して威力は小さいが、相手を驚かせる目的なので、そこは問題ではない。その音で一瞬耳がやられたのか、仰け反った大盾持ちは、バランスを崩す。

そして夕陽を背にして近づく俺を真面に見てしまつたのか、一瞬目を瞑つた。

終わりだ。

余つていた最後の爆発する薬品を顔面に投げつけ起爆する。

「くそ！ くそ！ 何なんだお前！ 畜生！」

威力が低くとも爆弾は爆弾。フルフェイスだが目の覗き穴に丁度入つてしまつたのも運が悪い。

もう光を映すことのないその焼け爛れた目を抑えながらも、最後の力を振り絞つて、俺が居る所に突撃を仕掛けてくる。

ここまで来るとコイツの執念には驚かされる。付き合つてやる必要もないけど……こんな機会もうないだろうし、妹にカッコイイ所見せておこう。

あ、敵の名誉のためにいうと、相手が万全の状態であの盾を構えていたら、俺程度での攻撃は入らなかつただろう。だから今から行うのは、死にかけの獣に止めを刺す……いうなれば駆除のそれだ。

騎士道とか真剣勝負とかは興味ないが、死にかけを斬るほど獣には落ちていない……つもりだ。

優しく首を刎ねる
白刃一閃

▽

戦闘が終わつて、敵の団員達も降伏……しなかつた。全員が全員持つていた武器で自

害しやがつた。

忠誠なのか狂信なのか分からぬが、2度とあんな連中には会いたくない。妹も流石に思うところがあるようで、シエロカルテさんと色々話し合っていた。

戦闘中は面倒だから流していたけど、表情が一切動かせない。体は動くのに、顔面の筋肉だけ凝り固まつたように動かせない。

これじゃ会話が出来ないから身振り手振りでしか意思疎通が出来ないな。

そんなゴタゴタが片付いて一段落すると、今度はこつちに視線が集まり出した。

心なしか団員さんたちの視線が怖い。

そんな中で満面の笑みで走つてくるジータ。

その肩の上で笑つているビィ。

目のハイライトが消えてほぼ無表情に近い微笑を浮かべながらウロボロスを展開しつつ全力で走つてくるヤバい人。

助けて

くつそ病弱だつたお兄ちゃん(故)が妹達に振り回される お話

チクタクチクタクと時計の針が進む音だけが部屋に響く。

目を泳がせて成り行きを見守るわが妹に、震えて存在を消そうと必死なビイ。

彼女の怒気に晒されて身動き一つとれない俺。

「……おい」

そしてとうとう、我慢の限界が来たカリオストロさんがキレた――！

「お前ふざけんなよ!? 妹を助けるためとはいえ俺の予備の体に入つた拳句に滅茶苦茶に負荷掛けてぶつ壊しやがるだと!?」

拳句に体から出る事出来ないとお前さあ……と、勝手に使われて壊されたカリオストロさんは大変ご立腹だ。

いやほんと申し訳ないです。ただでさえ妹の面倒を見てくれているというのに、保護者の俺までこんなにお世話になつて。

「お前ら兄弟は起こす事全部常識の理外じやないと気が済まねーのか。しかも顔面の筋肉だけ動かないから喋れないだと? あるかよそんな局地的な筋肉硬直! 全身が

ちゃんと動くように調節してるので。お前の顔面動かす力が無えだけだよ」

うーんこのド正論。俺はひたすらに頭を下げるしかない。本当にすいませんカリオストロさん。

「くっそ、俺の見た目だから可愛いのが余計腹立つ。数秒で鍊金の最奥に到達した奴はやつぱり非常識だなおい」

頭を下げるだけではと思い、近くにあつたメモ用紙にペンで謝罪の言葉を書く。

『すいません』

「まあカリオストロさんも落ち着いて？　お兄ちゃんも私を助けるために頑張ってくれたんだし、体の材料費とか費用とか騎空団の公庫から出すから……」

どうもカリオストロさんは、生前全てを掛けて成し遂げた技術を、感覚だけでやり遂げた俺に思うところがあるようだ……。

『着ぐるみを着る感覺でした』

「はあああああ！」

色々と限界が来たらしいカリオストロさんは、ウロボロスを展開して俺を拘束し、薬品漬けの巨大容器に押し込んだ。

いやあ……ごめんなさい。

体ぶつ壊したのは謝りますが、決してカリオストロさんに思うことがあるとか、そう

いつた事は断じて無いです！

普通の行動は特に問題なく出来るようになつた。

あの後カリオストロさんは文句を言いながらもしつかりと体を治してくれた。

大変だつたのは団員さんたちへの説明だ。兄が姉になつて帰つてきたとかいう謎のワードを皆さんに説明しきるだけで3日を要した。刀を使う団員さんからはそれはもう興味の視線を頂いた。

中には鯉口を切られた方も数名……いやあ、無理。練習試合とはいえ、勝てる気が一切しないな。

「あの、団長ちゃんのお兄様、是非是非私と一試合」

鯉口を切つたヤバい人筆頭のナルメアさん。この人、ジータ達に思いや悩みを全部ぶちまけて悟り開いた上でこの言動だからなあ。

今はメモ用紙とか持つていないので、申し訳ない顔をして頭を下げる。するとどうだろうか、シウンと目を伏せながら、気にしないでねと去っていく。

ふええこつちも色々と辛い。

どうも団員の皆さんには、俺は策をも弄する凄腕の刀使いと思われているらしい。

試しに数回刀を振つてみて、斬撃の内包とかやつてみたが……そもそも攻撃を当てられる

という確信 자체持てなかつた。だつて騎士団長だと二つ名持ちの人ばかりのこの人外魔境だもんなあ。

隙を見せたらお前の最期だとか言つたけど、見せる隙 자체が無い人だとどうしてもな。

「お兄ちゃん。ナルメアさんがそろそろ可哀想だよ？」

妹よお。お前は優しいな！ でも俺つて本来戦いとか嫌いなんだが！

『…………』

動かない表情と身振り手振りでジーダに伝えると、ジーダは苦笑いを返してきた。

「嫌いではあつても苦手ではないもんね。んー、私もお兄ちゃんの技もう少し見てみたいしなあ」

妹がぶつぶつと呟いて考え込んでしまつたので、カリオストロさんの部屋に避難した。普段から感覚で動いている妹が考え込むというのは、天変地異の前触れみたいなものだと、国内ではわりかし有名だ。

怖い怖い。

甲板にて

俺は今団員の皆さんに遠巻きに見つめる中、ナルメアさんと対峙しています。
おお、もう……どうしてこうなった？

くつそ病弱だったお兄ちゃん（故）が格上の人と模擬戦するお話

ジータさんやあ、どうしてそうも人が啞然とする事を平然と行えるんですかい？

目に入れても痛く無い程に愛しい妹なのだが、やる事なすこと悉くが酷い。

しかも一切の悪意無く、純粹な善意でやつてるってんだから。

今回の場合、ナルメアさんが可哀想だから場をセッティングしたんだと言いたげな表情だ。

「では、よろしくお願ひします」

見てみろジータ。このナルメアさんの表情の一体何処にそんな悲劇のヒロインが宿つてるんだ。

あんな笑顔初めて見る。

「……」

こつちはこつちで喋れないし。

しかも体から魂が抜けかけて動きにくいし。

身振り手振りで嫌だと表現しても伝わる気配も無いし。

感覚で入り込んだだけだから正直言つて何が起こってもおかしく無いのに、やつてる事戦いばかりじやねえか。

いや戦いの最中に守りたいからつて気持ちで出来てしまつた手前、戦いたくないとは言い難いが。

カリオストロさんはと言えば肉体に傷付けたら許さんつて表情だし。
すつごーく嫌々な感じの動作で一礼をして剣を構える。

更に言えば訓練用の木剣やら木刀じやなくて実戦用の真剣だ。

くん……れん？

そつか、訓練か……そつかあ。

ジータを守る為の実戦なら騎士道精神やら正々堂々なんて鼻で嗤うけど、こうも純粹に当たつてくる人つて初体験だから慣れないと。

下段に構えてナルメアさんが攻撃してくるのを待つてゐる。

10秒後。

20秒後。

「——そこつ」

ナルメアさんの神速の一撃が放たれた。

いや首い！？

この人何の躊躇も無く真剣で急所狙つてきたんだが！？

取り敢えず様子見で受け……止められる筈ないよなあ！？

チラッと見たけどカリオストロさんの顔色も結構な事になつて来てるし……。
取り敢えず今は避ける事に専念しないとツ……。

▽

良く分かんねえ化け物が根性論シスコンパワと精神論ナルメアで鍊金の真理の一部を行使しやがった。
それだけでも頭痛えつてのに、拳句には戦闘狂ナルメアとの模擬訓練でオレ様の試作体を使う
だと？

舐めてんじえねーぞクソガキ共が……つと、いけないいけないつ☆——はあ……。
武器振り回す近接戦はそこまで詳しく述べけどよ、真剣でやる必要あるのか？
見ろよ隅で埃被つて放置される木剣をよ。

まあ入つたもんは仕方ないから研究しようとしてたのになあ……見たかよあのナル
メア。真剣でいきなり首狙つてやがる。

お前それがオレ様の体つて分かつてんだろーな？

怒りを通り越して凄まじい疲労感だけが襲つて来る。胃と頭が鈍い鈍痛を訴えてき

やがる。

薬飲めば和らぐか……体をぶつ壊されそうな緊張感と簡単に体に入つた異常な技術に対する気持ちで最近寝れねーよ。

近接で戦う奴は、強い奴ほど無駄な動きが削ぎ落されて洗練されていく。中にはあえて派手に立ち回つて威圧するつて動きもあるが、大概は前者だ。

ナルメアなんてその洗練つて動きの最たる例だと思つてはいる。可愛さこそ無いが、抜刀から斬撃に至るまで最低限の動きしか無いつて事は、近接が少し苦手な俺様でも分かる。

ただ回避だけはあるの無駄な胸の影響でそこまでつて感じだが、それでもこの世界ではトップに程近い。この世界は、当たれば呪いや即死や毒なんて当たり前の武器が道端の石ころ感覺で転がつてはいる。

故に多少大げさな回避でもそれは正しい選択であるし、一度仕切り直す為にも後ろへ大きく跳んで回避も正しい選択肢だ。

対するジータの兄といえば、一言で表せば地味だ。地味ではあるが異常とも言える。アイツが攻撃を躱す時、どんなに大きく動いたとしても足がその場から1歩動く程度だ。

足1歩動かしつつ上半身を捻つて斬撃を躱す。

1回だけなどではなく、2回3回と軟体動物の様に躱していく。

ナルメアだつて手を抜いている訳じや無いだろうよ。攻撃密度とか言うのも凄まじい。

その凄まじい攻撃を連続で避けるもんだから、ついつい斬撃がすり抜けてるように見えるのもまた可笑しい。

そんな事出来る機能つけた覚えねーんだよなあ。何だアレ、才能って言葉で片付けていいのか？

あと他の奴らと違う点と言えば、武器大好きな奴らが戦闘中好んでやる鍔迫り合いとか言うのもやろうとしない。

自分の武器が脆いって認識からやらないんだろうが、それにしたつてなあ。

避けてばかりじやキリが無いって分かつてる筈だろ？

それとも決定的な隙とやらでも探してるとか？

くそ、オレ様の自信作の可愛い瞳だから分かんないツ☆

でも何となくだが、隙を伺つてるっぽいなアレ……ホント、頼むから壊してくれるな。

割と一点物だから壊されると洒落になんねーんだ。

早くナルメアの隙とか見つけて打ち込めよ!!!

▽

隙とかあるわけねーんだよなあ！

大体あつちは何年も修行と実戦を繰り返して來た歴戦の侍？だぞ。

対するこつちは生前寝たきりで死後人形の体に入つて初めて刀振つただけのパンピーだぞ。

何を期待した目で見てるんだよ。

平伏せ、一般人様だぞ。

「先程から私の攻撃は通つてない。しかし私に攻撃もしてこない。何故です？」

打ち込んだら返り討ちに会う未来しか感じないから動けないんです。何あの目力……腕の一本は貰つていくぞみたいな雰囲気なんだが。

団員全員忘れてるだろうけど、この体カリオストロさんの物なんだけど！？

まあ口は動かせないから、暫くしたら萎えて試合が中断するだろ。ジータがお世話をなつてる人達だが、此処は何とか引いてもらおう。

「ナルメアさーん！ お兄ちゃん今喋れないから言うだけ無駄だよー！」

「そうでしたね。では再開致しましよう」

くつそ病弱だつたお兄ちゃん(故)が格上の人には負けるお
話

首 頸動脈、太腿 眼球 また首と眼球、心臓。
さつきから狙つてる箇所全部急所なんだが!?

もうコレ確実に殺す気だろ!

「当たらない…太刀筋を読まれていてる」

人形の体でマジ助かつた。息切れって概念がほぼ無いから避ける事が出来る。

まあ逆を言えば、避けるだけで精一杯で、こっちが打ち込む隙が無くてやばい。
普通なら、どこかしらに確実に隙があるから、それを伺つて、俺の打ち込む姿勢とか
整つたら行くんだが。

この人さあ。

いやこの人に限らないんだよなあ。

ジータの騎空団に所属する中でも上位の奴らつて大概このレベルがデフォなんだよ
な。

ナルメアさんは、敢えて隙を晒すなんて事絶対にしない人だから、そういうった方面も

期待できない。

煙幕持つて無い。

閃光が発生する爆薬持つて無い。

毒薬持つて無い。

目つぶし用の砂利：そもそもここ船の上。

カリオストロさん、片腕犠牲にしたら怒るかな。
うん。まあ仕方ないよね。

などと考えていると、ナルメアさんの斬撃が通り過ぎた。

ここだ。ここしかない。

刀が振り切られた瞬間に全力で左半身を前にしてナルメアさんに逼迫する。
突如として動いたナルメアさんは僅かに険しい貌をする。
問題なのは、表情が険しいだけで、一切の動搖などが見えない点だ。
ちよつとぐらい驚いて欲しい。

もしかして筋線維とかの動きで全部把握してたりする!?
だつたら詰みなんだけど、もういいや行こう。
だつてこの体勢で躊躇したら多分一刀両断される。

「左腕貰います」

その言葉と同時に、凄まじい剣閃が左腕に到達し、カリオストロさんが必死になつて作り上げた最高級人形の左腕が宙を舞つた。

「おい th s g j k p l d」

言葉にならない悲鳴を上げるカリオストロさんを尻目に、腕から溢れ出る人工血液をナルメアさんの目に向けて飛ばした。だがそんな小細工もナルメアさんは予想していたのか、その飛沫一滴に至るまで全てを見切り回避した。

別にそれでいい。目潰し出来れば御の字だつたけど、目的は僅かの間だけでも俺の右腕を隠す事だし。

「お兄ちゃん……内包出来るの斬撃だけじゃないんだね」だからどうして口に出すんだジータああアアアアアア！

「！」

ほらバレた。この一瞬で奥の手もう看破されたけど!? ええい構わん行け！ 頑張れ俺！ どうせ千日手で打つ手無いんだからもういい！

刀の柄の下部分を持ち上半身をバネの様にして——突くべし！

この距離なら上下左右後方の回避は不可、受け流すのも大歓迎だ！

そうだよ文字通り渾身の突き技だよ。

まあそれも、ジータの言葉で全てを察したナルメアさんは対処してきた。

「迎撃させていただきます」

まさか俺の突きに対しても真正面から、同じ角度で突きを放つてくるとは。
……は？

ちよ、え、待つてほしい。

こちとら人形の体だから最悪損傷してもいいけど、そつち生身では！？

などと考えている間に、互いの刀身の切つ先がぶつかり合つた。

その瞬間、とんでもない不協和音が鳴り響く。

だが拮抗したのはほんの僅かなだけだった。

突きの中に3つ内包させた。

牙突という突き技は刀を使う人らは勿論知つてゐるし、連続突きだつて多用するだろ

う。

格好をつけて言うなれば、牙突三段。

でも所詮こっちの武器は大量生産品という事実は変わらない。

対して向こうは世界に2本と無い一点もの超強力な物だ。

俺の持っていた刀は衝撃に耐え切れず折れ、向こうは……あ、鱗は入った。

折れた刀を少し見た俺は、降参と手を上げた。

失望されたかなとナルメアさんを見ると、刀身を見ていた。
だが下を向いたまま直ぐに鞘に刀を戻した。

そうして顔を上げたナルメアさんは、この上無く嬉しそうに嗤つていた。

あ、駄目だこの人。



「ヌー、ネー」

カリオストロさんがぬとねの区別が着かない顔で斬り飛ばされた左腕を見てる。
かわいそう。

かわいそうではあるんだが、これ正気に戻った時の反動が一番怖いじゃないですかや
だ！」

なんだこれ、嵐の前の静けさか!?

「その、ね。ほら材料費とか追加の研究費とか公庫から出すから」

多分なんだけど、材料自体が洒落にならない程の希少性なんじゃないかな。

ほらカリオストロさんって4桁年前の材料とか持つてたけど、その中でも特に希少
だつたとか。

あれ、それ考えたら俺のやつてる事やばくね？

勝手に体を乗つ取つただけでも大概なのに、文句言いながら使うの認めてくれた人に
対して、物損を突き付けた訳だ。

しかも故意的に。

居た堪れなくなつて來たからカリオストロさんを抱きしめよう。片腕だけど。
ぎゅつと抱きしめると、目が合つた。

うわ目怖い。ハイライト無いし段々口が弧を描いて來た。
さつと離れてジータの後ろに身を隠す。

「お兄ちゃん。さつきの技なんだけど」

お前マジでちよつと空氣読んだ方がいいぞ！？

お世話になつてるカリオストロさんに兄妹共々ここまで迷惑掛けてんだからさ！

どうするよこの人騎空団の中で1、2を争うぐらい常識的な人なのに、そんな人怒ら
せるつてヤバいぞ。

「いや兄貴、カリオストロが常識人は無いぜ」

「ビイ何で今それ言つた!? なんでそんな火に油を注ぐ事言つた!?

「ちよつと、お話しよつか☆」

その可愛い声と同時、急に辺りが暗くなつた。

何ぞやと顔を上げると、カリオストロさんの相棒である龍が大口を開けて――

俺はそのままごっくんと飲み込まれた。